

8. 全身の異常な出血傾向を示した乳用子牛の一症例

玖珠家畜保健衛生所

○西田清実・廣瀬英明・佐藤邦雄・(病鑑) 矢崎竜

【はじめに】

2007年以降、ドイツを中心にヨーロッパ各国で若齢子牛が異常な出血傾向を示して死亡する症例が多数確認されている。名称は定まっておらず、「Blood Sweating Disease (以下 BSD)」等として報告されており、伝染病であるかも含めて原因は分かっていない。国内では、2007年に北海道の乳用牛1頭で類似の症例が報告されている。

2012年9月、管内酪農家において、8日齢のホルスタイン種の雌が全身皮膚から滲むような激しい出血を呈し衰弱。止血剤による治療を行ったが、同日夕方に死亡したことから当所に病性鑑定依頼があった。症状が「BSD」と類似していたためその概要を報告する。

【材料及び方法】

死亡子牛の解剖検査を実施し、常法に従い主要臓器の細菌学的検査、病理組織学的検査を実施した。ウイルス学的検査では、出血性感染症である BVD-MD 及び悪性カタル熱の遺伝子検査を行った。また、脾臓乳剤を用いたアスコリー反応及び心残血を用いた血液生化学検査を併せて行った。

また、当該子牛の母牛及び父牛の遺伝病調査も行い血液の異常を伴うような遺伝病の保有状況調査を実施すると共に、当該子牛の母牛、当該牛の異母兄弟等について、プロトロンビン時間 (PT) 及び活性化部分トロンボプラスチン時間 (APTT) を測定し、血液凝固系の異常の有無についての試験を実施した。

【結果】

解剖検査では、頭部から尾部までの広範な皮下及び各臓器の漿膜面及び粘膜面に点状・斑状出血が認められた。血液検査では血小板 9.8 万/ μ l、Ht 値は 10.5% と著しい血小板の減少及び貧血が認められた。細菌学的検査及びウイルス学的検査では、病原体の特定につながる所見は得られなかった。病理組織学検査では、脾臓、心臓、肺に重度の出血病変を、肝臓、脾臓、心臓、肺において赤血球貪食像を認めた。胸骨骨髄の骨髄形成不全、造血前駆細胞の減少等の所見は認められなかった。

出血を呈する遺伝病である牛白血球粘着性欠如症 (BLAD) は父牛、母方の父牛についても保有しておらず、母牛や異母兄弟の PT 及び APTT は正常範囲であった。

【まとめ及び考察】

今回の症例は、臨床所見や解剖所見は「BSD」と極めて類似していたが、BSD で多く認められる骨髄の異常は確認されず、原因の特定は困難であった。当該子牛の父牛の精液は海外輸入されたもので、国内でも広く使用されており、発症例数の少なさから遺伝病の可能性も低いと思われた。

同様の症例は例数が少なくあまり周知されていないことから、今後はこの症例に関し獣医師や生産者等に情報提供し、速やかに家保に連絡が来るような体制を整えたい。